

# 国語科教育研究における「授業研究」はどう行われまたどこに向かうべきか

——学会誌の中での授業研究のありようとこれからの方向性——

難波博孝

## 0. はじめに

授業を研究することは、実践の現場では当然行われていることである。それは、日々の実践を見つめ直し、明日の授業の改善を行うために必至のことであろう。では、国語科教育という研究分野での授業研究とは、一体何を行う行為なのだろうか。

当事者でもない研究者が、他人の授業を「研究」するとはどういう営みののだろうか。また授業の当事者であってもなくても、授業を研究したことを「論文」にするとはどういう営みののだろうか。そこには単に「明日の授業の改善に資する」こと以外のことがねらわれているはずである。しかしながらそのねらいはそれほど明確に意識されているわけではない。また、このことを真剣に考えることは、「実践」を「研究」するとはいかなることか、という教育学全体が背負っているアポリアに向き合うことでもある。

本論は、国語科教育の分野において授業というものの研究がどのように行われたかを、国語科教育の唯一の学会誌である『国語科教

育』（全国大学国語教育学会編）の掲載のありようから見ていき、そこに考察を加え、さらに国語科教育という学問の分野において授業研究が、これからどのように行われるべきかを考えていこうとするものである。

## 1. 『国語科教育』（全国大学国語教育学会編）掲載の授業研究関係論文について

『国語科教育』の中に収録された授業研究関係論文を洗い出し、次のように分類した。

A：狭義の授業研究：教師自らまたは共同研究者と共に行った、一時間～一単元の、実際の授業の研究 表1の（ ）は研究者による飛び込みの授業

なお、なんらかの（授業実践とは異なること、たとえば、子どもの読みの実態などの）仮説を検証したり、その実態を探究するために行われたりした授業は除いている。

B：実践の実践から着想した、ある領域の実践への提案

C：授業研究につながる研究：教師研究、授業の理論研究、学習

者研究

D:学会行事としての研究:研究授業とその討議、シンポジウム、など

収録された論文の一覧は次の通りである。

(A)

第6集

(文法教育の指導実践例として)

? (一九五九)「段落と接続詞の連関的指導」

第16集

堀 芳夫(一九六九)「夕鶴」受容の問題」

第20集

井上 勸嗣(一九七三)「表現力を育てる—文学的文章の指導—」

第21集

加留部謹一(一九七四)「模倣から創造へ—参考作品を導入した論理的文章の場合—」

第25集

中島 紀子(一九七八)「読むことと書くこととの関連指導」

第29集

世羅 博昭(一九八二)「『平家物語』の学習指導—「一の谷の合戦」場面を中心に—」

第31集

菅 邦男(一九八四)「詩教材『熱帯魚』の解釈—恣意性・多様性をめぐって—」研究者による飛び込みの

授業

第32集

澤本 和子(一九八五)「説明的文章読解の学習過程に関する研究—子どもの興味・関心、疑問を生かし論理的に読みとるために—」

第34集

北条 常久(一九八七)「説明的文章の読みと情報の関係」(研究者による飛び込みの授業)

第36集

田中美也子(一九八九)「説明的文章における「情報読み」学習の指導についての一考察—複数の資料の「比較読み」指導を通してみた文章と情報とのかかわり—」

高木 展郎(一九八九)

「国語科学習における映像の位置—映像を読む授業の試み—」

濱島 隆雄(一九八九)「より確かで深い読みの力を育てる国語科の授業—小説「信念」—」

第37集

柳橋 尚子(一九九〇)「説明と描写に関する考察(二)」

篠澤 幹夫(一九九〇)「『伝え合い』を生かした国語学習—物語単元「大造じいさんとガン」の実践を通して—」

佐藤 明宏(一九九〇)「子どもの読みの個性を生かす—「野の馬」の実践をもとに—」

第38集

唐崎 雅行（一九九二）「意欲的に古典学習に向かわせる指導の工夫―『枕草子』を題材にした総合単元学習の実践を通して―」

田中 宏幸（一九九二）「高等学校作文教育におけるインベンション指導の実践的研究―フリーターについて意見文を書かせる指導を通して―」

澤本 和子（一九九二）「事例列挙型説明文の学習方法研究―第三学年の場合―」

加藤 宏文（一九九二）「高等学校における語彙学習の一方法」

山下 俊幸（一九九二）「児童の状況的認知と文章産出の実際について―表現（作文）学習への状況論的アプローチ―」

第40集

牧戸 章（一九九三）「説明的文章表現指導の実践的研究―表現の内容と方法を保障する学習の生成―」

田中 宏幸（一九九三）「高等学校作文教育におけるインベンション指導―単元『私の友情論』の場合―」

第42集

米田 猛（一九九五）「作文指導に活かす語彙指導試論―感情表現の場合―」

第43集

井上 雅彦（一九九六）「ディベートによる（読み）の学習指導―

第45集

吉川 芳則（一九九八）「説明的文章の学習活動を改善するための一考察」

第46集

木村 勝博（一九九九）「文学の授業と「他者」―「読む」文学から「する」文学へ―」

第13集

平野 久雄（一九六六）「教材内容の精選と構造化（実践報告）―説明的文章の場合―」

第16集

萩原 春雄（一九六九）「語彙指導（実践報告）」

第18集

野口 芳宏（一九七二）「詩の鑑賞指導についての考察―「理解」と「鑑賞」との関連―」

第22集

中村 喬（一九七五）「発達段階を踏まえた作文指導についての一考察」

第43集

山下 俊幸（一九九六）「複線型学習展開に関する一考察―国語科単元学習への状況論的アプローチより―」

二値から多様な読みへ、そして多値へ―」

(C)

第5集

野地 潤家 (一九五八) 「国語教育学の理論的性格」

第39集

広瀬 節夫 (一九九二) 「国語科授業過程における学習者研究」

第42集

高木 展郎 (一九九五) 「国語科授業観形成の拠点―小学校教師へのアンケート調査を通して―」

小川 雅子 (一九九五) 「国語教育における教師の意識と実践の乖離」

第46集

間瀬 茂夫 (一九九九) 「国語科教師の持つ説明的文章の論理のとりえ方と指導理論に関する考察」

(D)

第8集特集 「学習目標と指導方法―特に小・中・高の読むことの指導において―」

第9集特集 「学習目標と指導方法」―特に説明文の読解指導について―

第10集 「授業研究の方法」

第11集 「I 授業研究」

第12集 第二十八回学会報告学会第二日 「授業研究」

第15集 古田 拓 (一九六八) 「杜子春」一時間の授業―発問のくふうとその実践―

第28集

シンポジウム 「国語教育の実験的研究―その課題と方法―」

上原 輝男 (一九八二) 「提案Ⅰ」

松山 羊一 (一九八二) 「提案Ⅱ教育の実験的研究の意義とその在り方〔その一〕」

金子 守 (一九八二) 「提案Ⅲ教育の実験的研究の意義とその在り方〔その二〕」

福沢 周亮 (一九八二) 「提案Ⅳ」

第32集

シンポジウム 「国語科授業研究の方法」

松山 羊一 (一九八五) 「国語科授業研究の方法」

長田 久男 (一九八五) 「国語科授業研究の方法」

洪谷 孝 (一九八五) 「室の高い授業をつくるための微標集めを―国語科授業研究の方法―」

第28集

シンポジウム 「国語教育の実験的研究―その課題と方法―」

上原 輝男 (一九八二) 「提案Ⅰ」

松山 羊一 (一九八二) 「提案Ⅱ教育の実験的研究の意義とその在り方〔その一〕」

金子 守 (一九八二) 「提案Ⅲ教育の実験的研究の意義とその在り方〔その二〕」

福沢 周亮 (一九八二) 「提案Ⅳ」

第32集

シンポジウム 「国語科授業研究の方法」

松山 羊一 (一九八五) 「国語科授業研究の方法」

長田 久男 (一九八五) 「国語科授業研究の方法」

洪谷 孝 (一九八五) 「室の高い授業をつくるための微標集めを―国語科授業研究の方法―」

以上の論文を一覧表にまとめ、さらに論文の内容を簡単にまとめて記したのが、表1である。

(表1) 「国語科教育」所収授業研究関係論文一覧

以上の論文を一覧表にまとめ、さらに論文の内容を簡単にまとめて記したのが、表1である。

年	号数	A	B	C	D
'58	5			一般理論	
'59	6	(文学・文法)			
'60	7				
1、4号には、ない。					

'82	'81	'80	'79	'78	'77	'76	'75	'74	'73	'72	'71	'70	'69	'68	'67	'66	'65	'64	'63	'62	'61	年
29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	号数
古典				説明・作文				説明・作文	文学・作文				文学									A
							作文				詩		語彙			説明						B
																						C
	(シンボ)													(文学)			共同・文学	共同・問題	共同・観点	共同・説明	共同・文学	D

'99	'98	'97	'96	'95	'94	'93	'92	'91	'90	'89	'88	'87	'86	'85	'84	'83	年				
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	号数				
文学・表現	説明		文学・音声	作文・語彙		作文	説明・作文	説明・表現	単元(語彙)	作文	単元(古典)	文学	文学・表現	文学	映像	説明	(説明)		説明・表現	(詩)	A
			単元																		B
論理観				授業観	教育観			学習者													C
																			シンボ		D

この表1からは、さまざまなことが読みとれよう。実際に行つた授業を分析考察する研究が、一九八九年以前は、学会誌には単発的にしか掲載されていないのに対し、36号（一九八九年）から急増していること、一九八九年以前では、20・25号（一九七三―七八年）あたりで、読むことと書くこととの関連指導についての研究が行われていたこと、また、39号（一九九二年）以後には、教師研究や学習者研究が行われるようになったことなどである。

では、学会誌の中で、授業研究の成果は、どのように受け継がれてきたのであろうか。授業という一回性のものに対する研究成果を受け継ぐには、ある特定の授業から得られた成果を越えて、授業一般を捉える「マクロな視点」の提出が、その論文に求められる。学会誌の中では、授業研究におけるマクロな視点は、どのように提出され、継承されてきたのだろうか。

## 2. 授業研究を見ていくための視点

学会誌「国語科教育」の授業研究関係の論文を見ていくための「マクロな視点」を導き出すために、難波（一九九九）で提案した、国語科教育の研究アプローチを利用したい。

授業の因果律を何らかのパラダイムで記述・説明することとは、没価値的な、一般的な所作である。そこには、「どうなるのがよいか」という発想は入るはずはない。一方で、授業の目的を語ることは、授業がまた学習者が「どうなるべきか」を問うことである。授業の因果律が完全に明らかになつたとしても（そんなことはありえ

ないが）、それで授業の目的が明らかになるものではない。授業の目的の研究は、きわめて価値的な所作である。

授業研究においても、国語教育研究においても、「授業はどうあるべきか」「学習者はどのように発達すべきか」という問いばかりが先走り、「授業はどうなっているか」「学習者はどのように発達するか」という研究が、乏しかった。その意味で、私は、国語教育研究においても、授業研究においても、没価値的な研究がもつと行われるべきだと考える。

しかし、目的論的研究が不必要なものではない。そのためには、「よい授業とは何か」「よく読めているとはどんな状態なのか」などの、価値についての思想、すなわちイデオロギー研究がもつと必要である。

ここまで見てきたように、研究アプローチには、没価値的な因果論に基づくいわゆる実証的なアプローチと、価値的な目的論に基づく実践的なアプローチがあることがわかる。そこで、難波（一九九九）では次の表のように、国語科教育の研究アプローチをまとめた。

（表2：国語科教育の研究アプローチ）

	価値の追求（目的論）	没価値的な普遍原理の追求（因果論）
演繹的	思想研究	説明研究
帰納的	実践研究	記述研究

それぞれのセルに入れられたアプローチは、次のように説明される。

(1) 記述研究部門：授業がどのようにおこっているかを、没価値的に(うまくいっているかどうか考慮せず)記述する。

(2) 説明研究部門：記述された授業を、いろいろな理論的な枠組みで説明する。いかにその授業がすぐれているかを説明するのではなく、その授業がどのようなメカニズムで動いているかを説明する。

(3) 思想研究部門：ある授業の基盤となっている、教師のあるいは授業研究者の、授業観・教育観・学習者観・国語教育目標観などを研究する。

(4) 実践研究部門：ある「思想」から得られた価値基準による、また「記述」「説明」研究から得られた成果に基づく、授業の研究。ある授業について価値判断を入れて、研究・開発する。

本論では、(1)(2)(3)の研究を総称して、「マクロな視点の研究」と呼び、この「マクロな視点」が「国語科教育」の授業関係論文にどのように提出され継承されていったかを見ていくことにする。

### 3. 「国語科教育」に見られる、授業研究のマクロな視点の提出・継承状況

#### 3. 1. はじまりとしての共同研究

学会誌の授業研究関係の最初の論文である第六集の論文は、文法事項の授業実践の紹介であり、当該の授業自身の検討も少なく、まして「授業研究のマクロな視点」の提出は見られない。したがって、「国語科教育」に見られる、授業研究のマクロな視点の提出・継承状況を見るには、その次の、第8集、第12集の、学会共同による授業研究の成果とその後の継承状況を見るのが一番であろう。

第8集(一九六一)特集「学習目標と指導方法」特に小・中・高の読むことの指導において――」

ここでは、はしがきの「国語教育学の基礎をなすものは、まず、事例研究である。その研究には、「教室事象」が考察されなくてはならない。(P.3)」にあるように、事例研究としての授業研究というコンセプトが打ち出され、小・中・高の学習指導案・研究授業・研究協議が行われた。この号では、文学教材の授業研究が行われた。

この号で見られる授業研究のマクロな視点としては、西平直喜氏の「授業経過の心理学的分析」という、さまざまな記号を使った授業記述が掲載されていることが注目される。授業そのものを、没価値的に記述するという、西平氏の方法がその後国語科教育研究に生かされることはなかったが、授業がどのように行われているかを、マクロに記述する方法が紹介されていたことは、注目したい。

第9集（一九六二）特集「学習目標と指導方法」——特に説明文の読解指導について——

この号では、授業というものをマクロに捉える視点を不十分なながらも提出し、その視点から絞って授業研究を行っている。そのまともには次のようにある。

「授業分析に、まず必要な五つの要素 一だれが 二だれに 三なにを 四どんなに 五なんのために一の「だれが」は教師養成の大学の附属校の教師 二の「だれに」は、その附属校の児童、生徒、三の「なにを」は教材として「説明文」四の「どんなに」は指導方法、五の「なんのために」は、単元設定の理由と、そこから導き出される目標となる。だから詳細詳細に研究するためには、この五つについて、それぞれ考察しなければならぬのであるが、今回の研究目標は「学習目標と指導法」であつたから、授業後の研究協議ではこの点にしばらくは。」

これらの分析の観点を見ると、授業を目的的行為として捉え、そのための分析の観点（つまり、「実践研究の観点」）を用意している。また、研究のねらいとしては、「教師としては、児童生徒の発表や質問、応答の中で、教材の事前研究以上に教材の核心にせまっていき、そこから目標と方法の確認と修正がどうおこなわれたか、一方、学習者としては学習中に、とくに高学年において、自分の読みかたの確認と修正、それが学友のことばと教師の指導によつてどうおこなわれたか、すなわち学習意識の自覚（P.119）をみる、というようにかなり「自覚的」に行われるようになった。したがって、その討

議の中で「目標」というような基本的な術語の内容をささえ、まだ明白にされていない事実を直視しなければならない。（P.117）」というような、授業研究における根源的な問いかけも、実践に基づいて提出されるようになった。提出された観心の背後にある思想にまで踏み込む必要があるという自覚も生まれている（思想面でのマクロ研究の萌芽）。

第10集（一九六三）「授業研究の方法」

この号では、これまでの授業研究の成果から、以下のような観点を設けて研究を行っている（P.44—5）。

国語科授業研究の観点

一 総合的立場

- 1 教室の空気（暖かさ、深さ等）
- 2 学習指導の流れ（速さ、間等）

二 分析的立場

- 1 教材の研究
- 2 児童・生徒の実態の把握
- 3 学習指導案
- ・ ・ ・ ・ ・
- 4 目標・学習内容の設定
- 5 学習指導の方法

学習型態

教式・授業の展開

6 教師の活動

話発問助言板書

7 児童・生徒の活動

応答質疑話しあい発表作業（ノート等）

この観点を見ると、まず総合的な立場の所には、第8集で議論され、また西平氏も提案した、授業全体を見ていこうとする姿勢の反映がある。第8集では、研究授業に対して、「授業の空気が固い、柔らかい」などの議論が西平氏の主導のもと行われた。その成果の継承が見られる。また、分析的立場では、第9集のまとめで提出された観点が、受け継がれている。このように、これらの観点は、今までの授業研究の成果を反映したものであると見ることが出来る。本論の枠組みでいえば、総合的な立場は、「記述研究」であり、分析的な立場は、「実践研究」である。

これらの観点に関して、次のような新たな提案も出された。

野地潤家氏は、「およそ授業研究には、授業者の固有の方法と形態でなされるばあいと、実験的意図を多く盛りこんで、それだけ問題点をはらむ方法と形態でなされるばあいとがある。」「もし後者の授業研究をとるとすれば、問題設定・教材研究・指導計画・授業実施を、共同研究としてすすめていくことも考えられよう。」「授業研究ということに重点をおけば、また別の形式も考えられよう。授業経過に即して、分析しえた事項を重ね合わせるように、記述していくこともできよう。授業後、授業者・学習者の授業をめぐっての協議

も考えられよう。」と述べており、授業の計画時からの共同研究の可能性・授業過程に即した分析・授業後の学習者も含めた検討が提案されている。

また、中西昇氏は、「(五)、(5)「学習指導の方法」は外面的な形であって、内面的な評価の観点が示されていないから、新しく生徒の主体性における必然的展開を見るべき項目を加えてはどうか。

(六)、総合的立場と分析的立場とが共にかなり外面的な感じを持つから、内面的基準に立って整理しなおしたらどうか。(七)、「評価」の観点がうたっていないが、どうであろうか。」と述べ、授業における、内面の展開・および評価について、提案されている。

このように、両氏は、授業開始以前からの共同研究・学習者を含みこんだ研究・学習者の内面も含めた、授業の内面的な展開の研究などの授業研究の新たな展開の可能性を提出している。

第11集（一九六四）「I 授業研究」

この号では、「読解指導における授業研究の諸問題」として次の問題が提起された（pp.6-7）（下位項目省略）。

- 一、予定された指導事項と授業展開のずれ
- 二、説明的文章と文学的文章との指導法のちがい
- 三、読解指導における問題法と精読法
- 四、授業展開における主題、要旨取り上げの時期
- 五、生徒間の話し合い。討議の機会と方法
- 六、文字・語句・語法指導の位置

七、発問および応答のあり方(適否) — 発言の種類  
八、板書およびノートの取り方

附 児童に各自の問題点や短文づくりの結果を板書させたり、書  
写させたり書写を的確にさせるための板書の問題

その中から、各地区で次のように問題と校種が選ばれ、研究授業  
と研究協議が行われた。

関東地区……第四問題 小学校

近畿地区……第八問題 中学校

中国地区……第二問題 高等学校

この号では、今までの授業実践の中から、また、これまでの授業  
研究の中から浮かび上がった、授業に関わる問題を考えるために、  
それらの問題の中から三つを選んで集中して議論している。こうい  
う目的のため、また、この号の研究協議の記述が、前3集のような  
討論そのものの収録でなく、記述者によりまとめられてしまってい  
るため、それぞれの研究協議において、参加者がどのようなマクロ  
な視点を持って授業を見ているかは見えてこない。

第12集(一九六五)

この号では、第二十八回学会の第二日報告として、斎藤喜門氏の  
「杜子春」を少時間で扱う学習指導案(中学一年)による研究授  
業と研究協議が行われている。その授業に対する研究協議の中で、教  
育方法学者の吉田昇氏は「授業研究の観点を」と問われて(二)

何を教えるか。国語の場合は同じ教材でも人によってまちまちなの  
で、たいへんむずかしい問題である。なにを主だと考えられてきて  
いるか、ここにも問題があると思う。(二)指導のねらいに従って順  
序がよかったか。(三)場の問題。教師—作品—コミュニケーション  
がうまくいったかどうか問題になると思う。国語の場合はまだ共  
通の授業分析が行われていないのが現状だと思う。(P.61)と述べ、  
国語科の授業研究に、共通のマクロな視点がないことを指摘してい  
る。

しかしながら、第8〜10集までは、授業そのものをどうみるか  
というマクロな視点の積み重ねがある程度見られたのであり、第11・  
12集と、個別的な議論に入ってしまったため、その継承にストップ  
がかかってしまったといえる。したがって、教育方法の分野からは、  
授業研究の枠組みという点から見ても、見える成果が挙がっていない  
とみえるだろう。では、第8〜10集までの成果は、以後の授業研究  
に活かされたであろうか。

### 3. 2. 孤立する学会誌の授業研究関係論文

表3は、学会誌掲載の授業研究関係論文(Dを除く)の参考・引  
用文献状況を示したものである。「文献数」はその論文に挙げられた  
引用・参考文献数を、「内学会誌」は、その参考文献の中で「国語  
科教育」に掲載された論文の数を示している。この表からどのよう  
なことが読みとれるだろうか。

(表3・学会誌掲載の授業研究関係論文の参考・引用文献状況)

A			
刊行年	著者名	文献数	内学会誌
一九五九	?	0	0
一九六九	堀	0	0
一九七三	井上	0	0
一九七四	加留部	0	0
一九七八	中島	0	0
一九八二	世羅	0	0
一九八四	菅	0	0
一九八五	澤本	5	0
一九八七	北条	4	0
一九八九	田中美	10	1※ア
一九八九	高木	11	0
一九八九	浜島	0	0
一九九〇	棚橋	6	1※イ
一九九〇	篠澤	0	0
一九九一	佐藤	5	0
一九九一	唐崎	0	0
一九九一	田中宏	11	0
一九九一	澤本	5	0
一九九一	加藤	11	0
一九九二	山下	16	0
一九九三	牧戸	5	0
一九九三	田中宏	10	1※イ
一九九五	米田	7	0

B・C			
刊行年	著者名	文献数	内学会誌
一九九六	井上	8	0
一九九八	吉川	13	0
一九九九	木村	10	0
一九五八	野地	5	0
一九六六	平野他	0	0
一九六九	萩原	0	0
一九七一	野口	0	0
一九七五	中村	0	0
一九九二	広瀬	2	0
一九九五	高木	8	0
一九九五	小川	13	0
一九九六	山下	7	1※イ
一九九九	間瀬	9	1※イ

(※アは、授業研究以外の学会誌論文を参考文献に挙げていることを示す。※イは、その論文著者が以前書いた学会誌論文を参考文献に挙げていることを示す。)

授業研究そのものとしてのAの論文群を見ると、一九八四年以前は、参考・引用文献がないこと、そしてなによりも、驚くべき事は、学会誌論文からの引用や参考文献への掲載がほとんどなく、あっても、自著の以前の論文への言及にとどまっている。

そして、先に示したような、学会が挙げて行った共同授業研究の成果を、明示的に引用・参考に行っている論文は一本もないのである。ここには、「孤立」した(また別のことばでは「自閉」した)学会誌の授業研究論文の姿が浮かび上がってくる。

#### 4. 孤立と引き裂かれの「授業研究」の背景

実践者は基本的に、引き裂かれている。授業を行うと言うことは当然の事ながら教師の立場で構想するのだから、「教師的側面」を實踐者はもつことになるが、一方で、授業を構想し授業を實踐するためには、実践者の心内に「学習者の側面」をもたなければならぬ。実践者自身が後者の面をもたないと、学習者のリアルな実態を捉える出発点にすらたてない。この両側面を持つことで、実践者は引き裂かれる状況に直面する。

一方で、国語教育研究には別の引き裂かれも存在する。野地（一九五八）は、国語教育学の二つの側面を次のように述べている。「国語教育学は、国語教育の基礎理論としての性格をもっている。」「国語教育学は、「実践から導かれる理論」としての性格をもっている」。これら二つの側面は次のような研究を必要としている。「国語教育理論を求めていく立場からは、（中略）先行理論・外国理論・関連科学の理論などの継承・摂取が必要なのはいうまでもない。」一方、「実践に導かれる理論」を生み出していくためには、実践主体の基本的立場の確立、実践精神・実践環境の反省、学習者との人間関係の重視、学習指導（実践）に即しての思考活動などが必要になる。」この「実践から導かれる理論」の成立過程・成立事情をみていくためには、「各実践者の実践体験の記述・述懐によらなくてはならない」しかも、それは「切実な実践体験」でなくてはならないと述べている。

国語教育研究者は、特に実践にかかわろうとする研究者は、いわゆる演繹的な「理論」と実践、しかも切実な実践から帰納される「理論」という、二つのかなり隔たりのある「理論」を構築しなければならぬ。別の言葉で言えば前者は没価値的な「記述研究」、説明研究」のための「理論」であるのに対し、後者は価値的な方向を持つ「実践研究」のための「理論」なのである。この引き裂かれはかなり大きい。したがって、国語教育研究者は、その両者の「理論」をつなぐことを必死で考えるが、その道はかなり困難である。

こうして考えると、国語教育において自らの実践をもとに研究することは、二重の引き裂かれを体験することになる。まず、授業実施における「学習者の側面」と「教師的側面」の引き裂かれであり、研究することにおける「没価値的理論」と「価値的理論」の引き裂かれである。この二重の引き裂かれはかなり苦しい。したがって、授業実践研究者は、このどれかの面を目をつぶって、実践・研究することになる。

また「価値的理論」は、個々の実践が切実であればあるほど、そこから得られる「理論」を他者は受け継ぐことは非常にむずかしい。その実践が優れたものであると考えれば考える程、「理論」として一般化することに、ためらいと恐れを感じてしまう。

さらに、国語教育研究では、他者の「没価値的理論」を批判継承するという慣習が成立していない。読むことにしても書くことにしても、例えばその分野の去年一年間の研究成果をレビューし、その成果を批判的に検討するというような、研究慣習が未だに成立していない。著名な実践者や研究者が書いた単行本などの成果を、無批

判に受け入れる一方で、現場の教師や大学院生の実践・研究成果は、ほとんど顧みられことなく消えていっている。

以上のような、二重の引き裂かれと二つの「理論」の非継承が、学会誌授業研究論文の孤立（それは、国語科授業研究のそのものの孤立であり、授業研究者の孤立でもある）へとつながっていったのではないだろうか。

## 5. 孤立と引き裂かれの「授業研究」から抜け出すために

このような状況をどのようにうち破っていけばいいだろうか。先に見たように、研究アプローチには、没価値的な因果論に基づきにくいゆる実証的なアプローチと、価値的な目的論に基づく実践的なアプローチがある。このアプローチの違いは、ギボンズら（一九九四）のいうモード論における知識生産におけるモード1とモード2の違いと対応していると考えられる。

ギボンズらによれば、モード1は、従来の「科学」の概念と変わらない、ある領域の学問分野の方法と目的に合致しその分野の訓練を受けた、いわゆる「科学者」が行う知識生産の様式である。それに対し、モード2は、「より広いコンテキスト、トランスディシiplinaryな社会的、経済的コンテキストのなかで生み出され（P.20）」、その担い手は「実践家」であり、実際の実践の最中に問題発見と問題解決が行われる、さまざまな分野の人々がコミュニケーションを取りながら行い、そこでは「流動的な問題解決能力（P.28）」が必要である。

国語教育研究を、このモード1とモード2が出会う場として捉えたいというのが、本論の立場である。従来の研究でもそれぞれのモードの研究が行われていたわけだが、モードの区別に意識的ではなく、そのため、実践研究が不必要な一般化を目指したり、ある理論の応用的な研究になったり、また逆に実証的な研究でありながら、具体的な授業への展開を無理して行ってきたことがあった。国語教育研究を、二つのモードの研究が出会う場とし、それぞれを峻別して再編成する必要がある。それをふまえて、次のような提案を行いたい。

### （1）実践研究（モード2の研究）のために

まず、モード2の研究アプローチに当たる、価値を目指す実践研究のためには、孤立を防ぐための、実践者・研究者の共同による研究を行うことを提案したい。これは、授業について、当事者と参与観察者が、実践にあらわれた問題を、開かれた場で考える討議を通して、しかも、各々の心の内部の「引き裂かれ」を互いに実感するための、可変的な役割を持って討議することで、実践者には当事者ではない視点からの授業改善のアイデアが得られ、一方研究者は、自らの研究の「実践における強度」が試されることになる。もちろんそこでは、実践・研究それぞれにおける「孤立と引き裂かれ」が語られ共有されて（もちろん全てを共有されることはないから、逆に自立を促されることにもなる）、実践や研究への意欲づけにもつながっていくだろう。

(2) 記述・説明研究(モード1の研究)のために

ここでは、国語科教育だけでなく、他の学問分野の研究成果をも、積極的にかつ合理的に取り入れた研究が、研究者の手によって行われなければならない。具体的には、

・ 国語科授業を記述するための枠組みの研究

・ 授業の、顕在的・潜在的構造の研究

・ 教師・学習者のそれぞれの内面を記述する研究

といった研究が、行われる必要がある。また、こういった分野における国語科教育研究自身の成果をまとめ継承していくような、組織的なシステムが必要となってくる。

(3) 思想研究(モード1の研究)のために

授業を実践したり記述したり研究したりする行為の背後には、なんらかの「思想(イデオロギー)」があるはずである。実践の場では、このような「思想」について顧みられることがない。しかし、国語科教育の研究では、実践され、実践が語られ、実践が改善され、実践が研究される、そのような場で働く「思想(イデオロギー)」について、鋭く迫っていく必要がある。それは、「国語科教育も「教育」という、すぐれて「イデオロギー」的な国家装置の一端を担うものであり、国語科教育研究という「研究」も、これまた「イデオロギー」的な装置となりつつある現在においては、極めて重要なことである。

(4) 二つのモードの研究が出会う場

以上の三つの研究アプローチが出会う場として「学会」は重要で

ある。「学会」は、それぞれのアプローチの自覚的な人々が集まる場であり、その成果を公開し討議する場であり、異なる立場の人々からの洗礼を受ける場でもある。そのような中で、自覚的で柔軟な国語科教育研究／実践者というものが育っていくと考える。

六、最後に―実際にどんなことができるか

私自身が上の(1)～(4)に関して、最近行っているのは次のようなこととことである。

(1) に関しては、次のようなことがある。

(1-1) 一九九八年第五回全国国語教育学会のラウンド

テーブル「本場に必要なことばの力とは何か」における、

授業観察とその発表及び討議(「ことばの学び」創刊号

ことばの学び研究会二〇〇〇年に所収)

(1-2) 愛知県岡崎市立羽根小学校での授業研究(「新しい授業

研究への模索」として「国語科の実践構想―授業研究の

方法と可能性 神戸大学教授浜本純逸先生退官記念論集」

東洋館出版社二〇〇一年に所収)

(1-3) 二〇〇〇年全国国語教育学会第九九回発表「第一次

の出会い―したたかな主体を立ち上げるための共同授業

研究―

(2) に関しては、(1-3)の発表時に、授業を記述するための

枠組みである「ステージ・フロア理論」を提案している。これは、「授業は、教師と発言する学習者だけで構成されるのではない——これが、本研究で使用しようとする「ステージ・フロア理論」の骨子である。確かに、授業は教師と選ばれた学習者（指名されたり自ら発言して教師に取り上げられた学習者）が進めていっている所もある。これを授業の「ステージ」と考えてみる。教師は常にステージにおり、学習者をにステージに上げていき、授業を進めている。しかし、授業は「ステージ部分」だけではない。全く発言しない学習者や一度ステージに上がって再び戻った学習者にも、授業は存在している。このような授業の「ステージ」以外の部分を授業の「フロア」と考えてみよう。例え全く発言もせず選ばれもしない学習者であっても、授業時間中には何かが起こっている。それがその学習者にとつての「授業」である。ステージ・フロア理論では、クラス的全学習者の授業中のようすを一人一人に起こす「授業」として記述する。こうして、授業は「ステージ」と学習者の人数分の「フロア」とから成る、複合テキストとして描かれるのである。（発表要旨集より）」というものであるが、この「ステージ・フロア理論」は開発の途上の理論であり、まだ見るべき成果は出せていない。

(3) に関しての最近の私の仕事は、「母語教育の一つの可能性に向けて——「*asta*」と「ダブルバインド」を拒否していく——」（『社会学』第16号、二〇〇一年）が挙げられる。これは、「異質な他者」という概念（その論文では「*asta*」と記している）を拒否することから出発し、自分にとつては、「他者」を指定することは、結

局「あなたとつながりたい、そして私を変えてほしい」（「私とつながりなさい。そうすればお前は変わるだろう」という存在を希求することであり、教育からますます離れていくと論じたものである。「他者」概念と授業というもののそれぞれのイデオロギー性の内実とその共犯関係を考察したものであり、今後私自身が、授業を考えていく上での、思想的な基盤としようとするものである。

(4) に関しては、従来からある「全国大学国語教育学会」の枠組みのさらなる改善に努力すると共に、新しい研究会を立ち上げてよりダイレクトに試行しようとしている。一つは、「HAT研究会」というものであり、牧戸章氏（滋賀大学）及び長澤貴氏（東京大学大学院）がそれぞれ行う共同授業研究の連合組織としての性格を持っている。ここで、それぞれが行っている共同授業研究の成果と問題点を話し合うことにしている。さらに「臨床国語教育研究会」というものを立ち上げている (<http://homepage.mac.com/nanba Hirota/Personal.html>)。これは、臨床的な授業研究を行おうとした組織であり、その設立趣意書は次のようになっている。

「本来、国語教育の研究には、さまざまな人々が関わっていかねばならないはずです。例えば、学校現場で働く人々、教育学を研究している人々、幼児教育に携わる人々、国語教育を研究している人々など。これらの人々が、それぞれの役割を自覚しつつ、しかも対等の立場で、「国語教育の現場」について語り合い、そこで得た知識と智慧と活力を、それぞれの人々がそれぞれの仕事場で生かしていきたい、そんな願いをもって、私たちは「臨床国語教育研究会」

を設立いたしました。

ここでいう「国語教育の現場」とは、学校教育の国語科授業にとどまるものではありません。人々が、母語にふれ、母語を教え学び、母語によって抑圧され鼓舞される場、すべてを指しています。また、「国語教育の現場」は、現在の「現場」を指すだけではありません。過去における「国語教育の現場」、未来における「国語教育の現場」をも指し示しています。時間・空間・位相の違いを超えて「国語教育の現場」では何が起こっているのか、また時間・空間・位相のそれぞれの違いの中で「国語教育の現場」はどのような違いを見せているか、こういったことを考えあうことができたらと、私たちは考えています。

本研究会では、研究の柱として、実践研究・発達（変容）研究・社会文化的研究の三つを考えています。ここでいう実践研究とは、「国語教育の現場」で行われている（た）のか、それはどのように記述・説明できるのか、また、何をどのようにすればいいのか、などについて研究するものと考えます。また、発達（変容）研究とは、「国語教育の現場」を経験することで、そこに関わった人々（例えば、教師・学習者・親・子など）がどのように発達（変容）するかについて研究するものと考えます。さらに、社会文化的研究とは、「国語教育の現場」やその中の構成員が、より広い社会文化的な文脈の中で、どのように構成されどのような影響を授受しているかを研究するものと考えます。そして、この三つの柱の研究を通して、「新しい国語（母語）の学び」を生み出していくことを目指したいと考えています。

臨床国語教育研究会で、さまざまな役割の人々が集い、語り合い、次への希望となることを願っています。」

以上のような取り組みを私自身も行っているが、こういった「実践」「実践的実践」と「理論的実践」を、多くの人々が自分たちなりに行うようになることを願っている。

#### 【引用文献】

ギボンズ・M編（一九九四）小林信一監訳（一九九七）『現代社会と知の創造—モード論とは何か—』丸善

難波博孝（一九九九）『説明文学習指導の基礎論的研究—テキスト分析論・読解モデル論・言語発達論を中心に—』（博士号請求論文 未刊行）

野地潤家（一九五八）『国語教育学の理論的性格』

第5集  
（広島大学）